



志度高だより 一飛翔の窓一

第98号
(H22.6.11.)

「麦秋の候」

麦秋の候、皆様方におかれましては益々ご清祥のこととお喜び申し上げます、などと6月に入ると、時節のあいさつが麦秋となる。うまく言うものだ、とつくづく感心する。日本人の季節に対する感性の冴えが光る。春先、まだ青々とした麦が、今はもうすっかり色づき真っ黄色。過ぎゆく風に穂をなびかせている。

それよりこの時期になるといつも思うことがある。それは、果たしてどちらの黄色が鮮やかか。稲それとも麦？ 私は断然稲の方が黄色いと思っていた。我々日本人は米を主食としているから、当然米への思い入れが強い。しかし、本当にそうだろうか、とあるときを境に考えが揺らぎはじめた。つまり、パンを主食とする欧米人にしてみれば、稲よりもむしろ麦。トウモロコシと並んで黄金色に輝く麦こそ黄色の最たるものではないのか。

この考えが浮かんだのは、オランダのゴッホ美術館を訪ねたときのことである。ゴッホの描いた麦畑は、大胆な筆遣いも手伝って強烈なインパクトを与えた。なかでも炎のようにうねる糸杉と尋常とは思えないカラスの群れを背景にした麦畑は、メラメラと燃え立っているようだった。

ゴッホの絵の前に立ち、私は考えた。麦ってこんなに黄色かった？ そのときは奇才ゴッホだからこうなるのだ、と片付けた。そして数年後、パリのオルセー美術館を訪れたとき、今度はヒマワリの絵の前で金縛りにあった。ヒマワリも真っ黄色で、周囲を乾燥させるくらい熱を放出していた。

先日、東京へ行く機会があり、六本木の新国立美術館で開催されているオルセー美術館展に足を運んだ。折しも三菱第一美術館ではマネ展が開催されていた。なんとという幸運。マネ展もオルセー美術館展も見応えのある作品ばかりで、久方ぶりの再会となったものもあった。ゴッホの作品も数点あり、『ゴッホの部屋』と『ヒマワリ』もその中に入った。それらを目の前にして、またしても麦畑の疑問が頭をもたげた。ゴッホの場合、どちらかと言えば静的な麦畑でさえ熱湯のように煮えたぎっている。どうしてゴッホの黄色には悪魔的とも思える力があるのか。

フロア中央のソファに腰を下ろし考えた。しかし、答えは出なかった。ゆっくり腰を上げ、隣の展示場に移った。ところがそこに入るや、全身の細胞が攪拌された。犯人はゴーギャン。彼の作品も個性の強いものばかりで、色遣いは常識の内にはない。それでも一枚の絵として見ると、互いの色彩が溶け合い、見事な重厚感となって額縁に納まっているのだ。ゴッホとゴーギャンは一時期共同生活をしていたが、どちらも強烈な個性の持ち主で、結局は性格の不一致で訣別することになる。ゴーギャンはゴッホを見限って単身タヒチへ。一方、失望したゴッホは精神を病み、後に自殺を企てる。



で、答えは？ 見つかったとも言えるし、見つからなかったとも言える。ゴッホ、ゴーギャンに限らず、一流と称される芸術家は個性の塊そのものである。芸術家それぞれのスタイルは、個性の表現によると換言してもいい。ゴッホの作品はゴッホの世界観であり、ゴッホの麦畑はゴッホの魂の代弁なのだ。キャンバスに盛り上がった絵の具には、彼の孤独、怒り、情熱、宗教的敬虔さ、病んでいく心からの逃避、そういったものがギュウギュウ詰めにされている。彼の麦の黄色が稲よりもより黄色く感じられるのは、彼の魂の炎が燃えさかっているからで、両者の持つ色彩の違いではない。その証拠に、彼の作品に星空を描いたものがある。夜空は紺色でどこまでも深い。紺色のしじまを破るように星が瞬き、光が帯状に滴り落ちている。夜景なのに昼間の激しさを感じさせる。つまり、彼は何を描いても、魂のほとぼしりを絵に移植する画家なのだ。ゴーギャンにしてもそうである。セザンヌ、マネ、モネ、スーラー、ドガ、ルノワール。彼らも同じである。

ときどき、ジャポニズムに心酔したゴッホが収穫前の稲穂の波を前にしたら、いったいどんな絵を描くだろうか、と想像することがある。きっと麦畑より強烈な黄色で魂のうねりを表現するに違いない。人それぞれ魂の叫びというものがある。命の叫びとも言える。それを咀嚼し、自分なりにどう表現するか。それも人それぞれである。ストイックな生活を求める者、酒に走る者、児童ポルノに魂を売る者。人の数だけ人生がある。

最後に、麦秋の候、皆様方にはくれぐれもご自愛のほどを。

